慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	実らなかった対話 : ゲーテとリヒテンベルクの往復書簡
Sub Title	Das nicht zustandegekommene Gespräch zwischen Goethe und Lichtenberg
Author	内田, 俊一(Uchida, Shunichi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1992
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.60, (1992. 3) ,p.75- 89
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	中田美喜教授追悼論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00600001-0075

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

実らなかった対話

――ゲーテとリヒテンベルクの往復書簡――

内田俊一

I

一七九二年五月十一日、当時四十一才でその文名はすでにヨーロッパ中に行き渡り、ヴァイマルの宮廷の顧問官でもあったゲーテは、七才年長のゲッティンゲン大学教授ゲオルク・クリストフ・リヒテンベルクに宛てて、次のような恭々しい言葉で始まる書簡を送る。

自然学の研究において私が貴台にいかに多くを負っているかを御存知であったならば、私がこの機会をとらえて感謝の言葉を申し上げるのも当然と思われるに違いありません。(1)

彼はこの書簡とともに『光学への寄与』の第一部と第二部を送り、自分の仕事の進展ぐあいを今後も報告させていただ

きたいとの言葉を添える。フランス革命から対仏第一次同盟戦争へと至る騒然たる時代であったにもかかわらず、あるいはむしろそれゆえに、この時期のゲーテの関心は自然科学、特に色彩論に向っていた。彼にとってはこの問題のほうが時代の動向などよりも重要な、というよりも根底において時代の動向を規定する問題と思われたのかもしれない。

すでに九年前にゲーテはリヒテンベルクの私的講義を受けたことがあった。また自然科学についてのゲーテの知識の主要な源泉は、新版のたびごとにリヒテンベルクによって手を加えられ増補されていたエルクスレーベンの『自然学概要』だった。冒頭に引用した書簡の一節は主にこのことを指していると思われる。色彩論の問題についてゲーテが教えを請うとすれば、この物理学者以上に適した人物は思い浮かばなかったのだろう。

この最初の書簡に対するリヒテンベルクの返書は残っていない。しかし六月末に送られたと推測されるゲーテの第二信の案文から判断する限り、リヒテンベルクの反応は好意的なものだった。

私の仕事に御関心をお持ちになって下さったことを証す貴台の御書状で、私は大変勇気づけられました。そして私が御披露した諸々の実験が、貴台の多年にわたる御省察につながるものであるとお聞きすること以上に、私にとってうれしいことがほかにあるでしょうか。……今や貴台がこの題材がもう一度徹底的に、いわば最初から調べあげられるのを御覧になりたいと、そしてそのために必要な努力には関与してもよいとお考えになっていらっしゃることをうかがったのですから、私の進むべき道を定め、私を鼓舞して下さるような御指示を時折いただけるようにお願いしても、許していただけるものと思います。(2)

一年以上の間をおいて一七九三年八月十一日に、ゲーテは戦争のためにゆっくり時間をとることができないと嘆きながら、『光学への寄与』第三部として構想された「有色の影について」の原稿をリヒテンベルクに送り、講評と教示を願う。これに対するリヒテンベルクの返書（十月七日付）は、体調がすぐれないために返事が遅れたことを詫びる言葉で始まっている。この書簡は彼のゲーテ宛書簡の中ではおそらく唯一の、かなり長文にわたるものであって、ゲーテがここで論じている現象に対して彼が寄せた関心の強さをうかがわせる。彼がどれほど活発な好奇心をもってこの現象に取り組んだかは、たとえば次の一節からも読みとることができるだろう。

閣下の御書状をいただいて以来、私はかつて子供の頃に蝶を追い回したように、色とりどりな影を追いかけ回していますので、先日わが家の部屋のひとつで思いがけず素晴らしい光景を目にしました。(3)

彼はゲーテによって初めてこの現象の重要性に気づかされたと述べ、ゲーテの努力を讃えるが、しかしある重要な一点において同意を与えることを拒む。

閣下が御理論の裏付けとしておられる目を見張るばかりの諸実験にもかかわらず、……私はしかし私が観察した幾つかの点から見て、まだそれを完全に無条件で正しいと判断する決心がつきません。(4)

彼が批判する最大の点は白とか白い紙といった表現のあいまいさである。

日常生活で私たちが白と呼ぶのは白く見える物のことではありません。そうではなくて純粋な太陽光、あるいは質の点で太陽光とさほど違わない光を浴びた場合に白く見えるであろうものを私たちは白と呼ぶのです。私たちが諸々の物体において白と呼ぶのは、その純粋な白色そのものというよりは、むしろ白になるための、そして白であることができるための、それもあらゆる段階を含んだ素質のことなのです。(5)

たとえばこの一枚の紙をどんな薄明りのもとで見ても、私たちはそれを白いと思うが、実際にはそれはまったく白には見えていない。

私たちはもちろんこのことに気がつかないのですが、それは視覚に基く私たちの判断のすべてにおいて、判断と感覚とが癒着してしまうために、ある年齢になるとそれらをふたたび切り離すことができなくなるからなのです。私たちはいかなる瞬間においても、私たちが本来推量しているにすぎないものを、感じていると思っているのです。(6)

一言で言えば、私たちが白と呼んでいるのは、あらゆる種類の有色光を同じ強度であらゆる方向に反射させる、物体の表面の素質のことなのです。(7)

ともあれリヒテンベルクは、ゲーテが取りあげた有色の影という現象の重要性は認め、今後の彼の努力に期待していると述べて協力を約束する。

ゲーテの返書は十月二十三日に送られたと推測されている。その案文によれば、リヒテンベルクの疑念は彼にとってもっとも重要なものであって、もしリヒテンベルクが彼の一連の実験や、そこから引き出した結論に疑念を持つのだとすれば、彼としても自分の実験方法や判断を疑ってみないわけにはいかない。今後も自分の論文を送るので、意見を聞かせていただきたい。この書簡もかなり長文に及ぶものである。しかしそれにもかかわらず、リヒテンベルクの批判の最大の眼目だった「白」の問題に関しては、ただ次のようなそっけない一文が置かれているだけである。

> 貴台が御書状の中で白について述べられていることは、白が様々な色彩の統合から生じるとする学説にのっとっているように、私には思われます。このことについての私の考え方をお知らせし、御検証に委ねることは差し控えたいと思います。(8)

ゲーテはリヒテンベルクが取りあげていたそのほかの様々な点については、それぞれていねいに説明を加えまた論じており、しかもそれを大学者に教えを請う素人の独学者といった趣の、ほとんど卑屈と言ってよいほど謙虚な態度で行っているだけに、このそっけない一文の異様さはきわだっている。それでも最後にゲーテは新ためて勇気づけられたと述べ、これからもこの問題について取り組んでいく決意を伝える。

リヒテンベルクはこの書簡に対して返事を書かなかったように思われる。次いで十二月二十九日に、ゲーテは『光学

への寄与』第四部の「色彩論の諸要素を発見する試み」の原稿を、次の言葉とともにリヒテンベルクに送る。

私はもう一度入念に手を加えるか、少なくとも幾つか必要な註を付けたかったのですが、しかしそれでは御教示をいただく機会をのがしてしまうことになるでしょう。[9]

リヒテンベルクの返書はなんと三ヵ月半を経た一七九四年四月十八日付のものである。デンマークの経済学者のオルフセンなる人物の紹介状として書かれたもので、しかもゲーテの論文への言及は回避され、ただ「事情が許せば、この休暇の内にもそれについての意見をお伝えしたいと思う」[10]とのみ記されている。ところがそのオルフセンには彼はこう求めていた。

どうかゲーテ氏には、私が彼の最後の原稿を見ていなかったことは言わないで下さい。というのも私がそれを本当に読んだのは今朝のことで、もし事情が許せば、休暇中には幾つか感じたことを彼に伝えたいと思っているところなのです。彼はあらゆる色彩を、少々大胆な、しかし常に含蓄に富んだ仕方で、青と黄から導き出しています。赤さえもです。頭の良い人はあらゆる面で輝きを発するものです。[11]

ゲーテは六月九日に再度教示を求め、「私がどんな種類の修正や異議にも耐えることができるということは確言いたします」[12]とまで書き添えている。しかしこの希望はついに満たされぬまま終わることになる。

たしかにこの時期から一七九九年の死に至るまで、リヒテンベルクの体調がきわめて悪く、満足な活動ができなかったのは事実だが、この「怠惰」の原因を体調にばかり求めるわけにはいかない。ゲーテの要望を無視し続けたことで、しばしばリヒテンベルクは非難されている。しかし赤までをも含むあらゆる色彩を青と黄から導出するというゲーテの理論は、今日の常識のみならず当時の常識から見ても奇怪としか呼びようのないものだった。この色彩の二元論は、近代的自然科学の「客観性」をあくまで受け入れまいとするゲーテの反ニュートン的色彩論体系のひとつの根幹をなすものだろう。それはこの体系の全体の内に置かれてこそ、その姿勢の強烈さによってひとつの意味を帯びることができるが、それだけを抜き出せば、愚かしい迷妄からさほど離れているわけではない。こりかたまったニュートン主義者ならずとも、これに賛意を表することはむずかしい。いったいリヒテンベルクにとって語るべきいかなる言葉があっただろうか。

この年の末にはリヒテンベルクによる最後の改訂版となった『自然学概要』第六版が出版される。これはもともとゲッティンゲン大学における彼の前任者エルクスレーベンの著書だったのだが、リヒテンベルクは改訂の度ごとにそれに最新の文献名を添えるだけでなく、様々な註釈や批評を加えていくことによって、元の本とはまったく性質の異なる書物に変貌させてしまっていた。[13] この『自然学概要』に自分の名を載せてもらいたいということが、ゲーテの側から見たこの書簡の往復の主要な動機のひとつであったことは疑えない。それは自然科学者としての彼の仕事の認知を意味するはずだった。しかしそこにゲーテに対する批評はおろか、文献のひとつとしてさえもゲーテの名を見出すことはできなかった。[14] これは彼を失望させるに十分な出来事だった。一七九五年十一月二十一日彼はシラーに宛ててこう書いている。

たとえばあなたはどう思われるでしょう。私はリヒテンベルクとは例の光学上の件について書簡を遣り取りし、ちなみにまずまずの関係を保っているのですが、その彼がエルクスレーベンの概要の新版の中で私の諸実験には触れようともしなかったのです。概要の新版を出すのは最新の情報を載せるためなのですし、専門家のお歴々は、彼らの本の書き込み用のページに、なんでもかんでもすぐさま書きとめるのを習性にしているというのにです。そのような論文をことのついでに片付けるだけでもいろいろとやり方はあるではありませんか。ところがあの機知に富んだ頭脳の持ち主が、そうした方法のひとつだにその時点では思いつくことができなかったのです。(15)

このちもなお数回書簡は交わされるが、どれもみな短文のものばかりで、どちらの側ももはや色彩論に関する事柄を持ち出そうとはしなかった。一七九六年十二月二十六日に出されたと推測されるゲーテの書簡の案文には次のような言葉が見出される。ちなみにこれが二人の往復書簡を締め括る最後の言葉となったのだった。

あなたにお話ししたいことは数々ありますし、あなたにお尋ねしたいことも数々あります。しかし熟していない事柄は対話には適していても、書簡の往復には向きません。話し合えばどんな思い違いも簡単に解きほぐすことができますが、書面ではいわばますます強固なものになってしまうのです。(16)

この書簡から二年二ヵ月後にリヒテンベルクは死ぬ。後世に彼の「アフォリズム」として知られ、多くの文学者に強い影響を与え、彼の名を不滅のものとするノート群の抜粋の出版が開始され、彼の精神の振幅の大きさが、ようやくそ

の一部なりとも姿を現わすのは、彼の死後一年以上を経たのちのことである。従ってリヒテンベルクと書簡を交わしていた時期のゲーテの眼には、リヒテンベルクの姿がその精神の全容において見えていたわけではなかった。見えていたのは単に自然科学者としての、あるいはせいぜい啓蒙的・諷刺的で機知に富んだ、軽い読み物の作者としてのリヒテンベルクにすぎなかった。

みずからがもっとも自負する営為を無視された（と感じた）ゲーテのルサンチマンはその後も長く尾を引いたように思われる。リヒテンベルクについてのその後の彼の発言には愛憎半ばする態度が見てとれる。彼がようやくリヒテンベルクの精神の強さと豊かさを認め、それを讃える言葉を書くのは、リヒテンベルクの死後三十年を経て、みずからの死をも視野にとらえ始めた時だった。

Ⅱ

今日の眼で見ればゲーテは文学者である。そんなことは言うまでもないと思われるかもしれないが、しかしこれはそれほど自明のことではない。たとえばリヒテンベルクは当時の人々にとっては物理学者だったが、現代の眼から見れば「アフォリズム」の作者であり、むしろ文学者と見なされている。ゲーテは自分を単なる文学者とは思っていなかった。少なくともそう思いたくはなかった。ゲーテにとって人間の精神はあくまでもひとつの全体であって、こまかく細分化されるようなものではなかったし、細分化されてはならなかった。

ゲーテは自然科学の分野におけるみずからの業績を作家としての活動にも劣らぬものと見なしていた。リヒテンベルクとの書簡の往復の時期に彼に送って批評を求めた『光学への寄与』の連作を、ゲーテはのちに構成から組み立て直し、

壮大な『色彩論』として完成することになる。そして自然科学分野の仕事の中でも特にこの『色彩論』を、彼は自分の文学上のいかなる業績にも劣らぬ、いやむしろそれらすべてに勝るものと自負したのだった。しかしまたこの著作は、ゲーテのこの分野の仕事の中でも、当時の自然科学者たちに認められることのもっとも少ないものだった。専門家たちの拒絶の大きさとゲーテの自負の大きさとはちょうど釣合っている。

すでに十八世紀には、精密自然科学によって世界はすべて究め尽くされるという世界観、あるいは一種の信仰は広く根を張っていた。その点で十八世紀の人間は現代人と同じ空気を吸っていた。こうした考え方の源をたどれば、おそらくデカルトによる思惟と延長の分離にまで溯ることができるだろう。そのとき以来主観と客観は切り離され、客観のみが「現実」と見なされ、主観は「現実」でないもの、すなわち文学や哲学や宗教の分野とされるに至った。しかし客観は主観があってこそはじめて存在するのだし、客観を欠いた主観の存在など妄想にすぎない。主観を一切排し、客観を客観的に探求しようとする近代の数量的自然科学の理想は、実はもはや目につかぬほどまで大きく膨れあがった主観をその背後に隠している。

色彩は主観と客観のあわいにある現象である。ゲーテがこの現象に強く魅かれた理由はおそらくそこにある。事実ゲーテがその反ニュートン的体系をその上に築きあげた諸々の観察は、すべて光と眼の相互作用から生じる現象に関わっている。それはニュートン光学の立場からすれば眼の錯覚に還元されるが、別のとらえ方をすれば主観と客観の相互依存に基く現象なのである。

ゲーテのニュートン光学に対する批判はその中心部に向けられていた。白色光をプリズムにかけると、赤から黄に至る有色光が分光されて出てくる。ニュートンはこれをそれぞれの有色光の波長の違いに基く屈折率の相違によって説明

し、また逆に波長の違う幾種類かの有色光を合成すると白色光が生ずるとした。ゲーテにはこれはどうしても受け入れ難いものだった。ゲーテにとって色彩とはあくまでも「見るもの」と「見られるもの」の相互関係に基くものであって、「見るもの」の側を一切無視して、波長や屈折率といった数量的なものに還元できるような性質のものではなかった。白色光が様々な有色光からの合成物であるという見解は、ゲーテにとっては悪しき数量的自然科学が生んだ迷妄以外の何ものでもなかった。

従ってリヒテンベルクが九三年十月七日付の書簡の中で、白という表現のあいまいさを衝いた時、それはゲーテの色彩論全体の根幹に触れるものだった。この問題についてのゲーテの返書でのそっけない、ほとんど拒絶的と言ってよい態度はそのことから説明することができる。ゲーテは、この返書と同時期に書かれたと推測されるヘルダー宛の書簡[17]の中では、リヒテンベルクがニュートン光学の偏見にとらわれていると言いたいかのような口ぶりで語っている。

たしかにリヒテンベルクが先の書簡において白について述べる際に、ニュートン光学の基本的見解を受け入れて語っているのは事実である。しかしだからといってリヒテンベルクがニュートン光学の体系に搦め捕られて身動きができなくなっていたということにはならない。良くも悪くも彼にとってもっとも縁遠いものは体系だった。同じ書簡の中で判断と感覚の癒着について彼が語っている言葉を読んだだけでも知られるように、彼は相対主義の権化のような懐疑論者である。このような懐疑論者にとって、ひとつの体系に安住することほど難しいことはない。カネッティはリヒテンベルクについてこう語っている。

彼は理論を避けることはない。しかしどんな理論も彼にとっては着想のためのきっかけである。彼は体系に引き込

まれることなしに、体系と遊ぶことができる。[18]

もともとゲーテもリヒテンベルクのこうした精神の姿勢を知っていたからこそ、当時すでにニュートン光学によって固め尽され、無気質なものにし尽された観のあった色彩の問題について、彼に教示を願ったのではなかっただろうか。

リヒテンベルクの側がゲーテに覚えた不満は、おそらく個別の問題に関することではなかった。ゲーテには、個々の観察に基いてそこから結論を引き出すというよりは、最初からニュートンに対抗する体系の構築を企て、そこから翻って個々の経験に意味を付与していこうとする姿勢がほの見える。白についての自分の見解の披瀝を拒む彼の態度からもそれを感じ取ることができるだろう。リヒテンベルクはすでに先の書簡で、直接ゲーテを名指してではないが、明らかにゲーテを意識しながらこう述べていた。

諸々の観察が著者の目標へ向けられた想像力によって何ほどか手を加えられていなかったならば、と惜しまれます。こうしたことはほかならぬ物理学のこの分野においては、観察者にまったく悪意がなかったとしても、他の分野におけるよりも容易に起こることなのです。[19]

たしかにゲーテの色彩論の壮大な体系が、ニュートン光学の体系と鋭く対峙し、そのことによって近代の数量的自然科学に反省を迫る契機たりえていることは間違いない。しかしそれはリヒテンベルクの道ではなかった。

ゲーテが『色彩論』全巻を完成したのは、リヒテンベルクの死後十一年を経たのちのことだった。もしリヒテンベル

クがこの完成した体系を見ることができたとしたら彼は何を語っただろうか、それを知ることはできない。しかしリヒテンベルクよりも三十年以上生き永らえたゲーテは、往復書簡の当時には隠れていたリヒテンベルクの精神の全体像が徐々に姿を現わすのをまのあたりにすることができた。次に引くのは一八二〇年代の末に書かれたと推測されるゲーテの言葉である。

リヒテンベルクの書いたものを、私たちはなんとも不思議な占い棒として利用することができる。彼が冗談を言う時、そこには問題が隠されている。

火星と木星の間の広大で空虚な宇宙空間に、彼は愉快な着想を置いた。カントが、この二つの惑星はその間の空間に物質として存在したすべてのものを吸収し同化してしまったと周到に立証した時、彼はいつものやり方で冗談めかして言った。「なぜ目に見えない世界が存在してはいけないのだろうか」と。そして彼が言ったことは完全に正しかったのではないだろうか。新たに発見された諸惑星は少数の天文学者を除いては世界中の誰の目にも見えず、私たちは彼らの言葉と計算を信用する以外にないのではないだろうか。[20]（『箴言と省察』、ヘッカー番号七一三、七一四）

体系の隙間の広大で空虚な空間に目を凝らし続けたリヒテンベルクを評した言葉として、おそらくこれ以上に適切な表現は以後もない。

文学者でありながら、みずからの自然科学上の仕事に最大の意義を認めていたゲーテと、物理学者でありながら、人

間精神のあらゆる領域を包摂する膨大なノート群を遺したリヒテンベルクとは、外見の相異にもかかわらず、きわめて近い場所に立っていた。だが二人の間には深淵が横たわっていた。それを埋めることこそ二人の共通の課題だったが、世界の大きさと較べれば微々たる溝も、人間にとってはあまりに巨大なものだった。二人は深淵の両側に立ちつくしたままついに言葉を通じさせることなく終った。その深淵はいまもそこに大きく口を開けている。

註

○ゲーテの書簡の引用は次のものに従う。

Goethes Werke. Hrsg. im Auftrage der Großherzogin Sophie von Sachsen, Weimar 1887ff. IV. Abteilung.

以下 WA と略記し、書簡番号、巻数、ページ数の順に挙げる。

○リヒテンベルクの書簡の引用は次のものに従う。

Georg Christoph Lichtenberg: Briefe. Hrsg. von A. Leitzmann u. C. Schüddekopf, Leipzig 1901ff. Band III.

以下 LB と略記し、書簡番号、ページ数の順に挙げる。

(1) WA, 2915a, Bd. 30, S. 48.
(2) WA, 2922, Bd. 9, S. 314.
(3) LB, 641, S. 93.
(4) ebd., S. 90.
(5) edd., S. 90f
(6) edd., S. 91.
(7) ebd.
(8) WA, 3021, Bd. 10, S. 118.
(9) WA, 3030a, Bd. 30, S. 51f.

(10) LB, 653, S. 108.
(11) LB, 654, S. 108f.
(12) WA, 3063a, Bd. 30, S. 54f.
(13) これについては拙論「反書物としての書物――リヒテンベルクの『控え帳』について――」(法政大学教養部「紀要」第六十五号、一九八八年)、特に一〇一～一〇二ページを参照。
(14) リヒテンベルクが『概要』のこの版でゲーテについても触れようとしていたと受け取れる書付の存在についての証言もある(cf. Franz H. Mautner: Lichtenberg. Geschichte seines Geistes. Berlin 1968, S. 360)が、なぜ最終的に一切黙殺する結果になったのか、その真相はわからない。
(15) WA, 3232, Bd. 10, S. 335.
(16) WA, 3456, Bd. 11, S. 298.
(17) WA, 3020, Bd. 10, S. 116.
(18) Elias Canetti: Die Provinz des Menschen. Aufzeichnungen 1942–1972. München 1973, S. 304.
(19) LB, 641, S. 90.
(20) J. W. Goethe: Gedenkausgabe der Werke, Briefe und Gespräche. Hrsg. von Ernst Beutler, Zürich und Stuttgart, 2. Auflage 1961ff., Bd. 9, S. 594f.

主要参考文献(註に挙げたものを除く)

○Helmut Heißenbüttel: Farbige Schatten. Goethe gelesen mit Hilfe von Lichtenberg. In: Sonderband aus der Reihe TEXT+KRITIK „Johann Wolfgang von Goethe". Hrsg. von H. L. Arnold, München 1982.
○Lothar Schäfer: Skepsis, Aufklärung und Wissenschaftstheorie bei G. Chr. Lichtenberg. In: Lichtenberg. Streifzüge der Phantasie. Hrsg. von J. Zimmermann, Hamburg 1988.
○高橋義人『形態と象徴――ゲーテと「緑の自然科学」』、岩波書店、一九八八年。
○吉本隆明「ゲーテの色」、潮出版社版『ゲーテ全集』月報10、11、12、一九八〇年。